

ゲーテ著「イタリア紀行(上)」岩波文庫、岩波書店 1942 年月 1 日刊を読む

### <パドヴァ>

#### <パドヴァ大学>

- 膨大な楕円形の場所を囲んで、塑像が林立している。
- この地で教育を受けたり、または、教育を受けたりしたことのある名士は、一人残らずここに飾られる。
- この土地の人たるとを問わず何人にも、ある人物の功績と、パドヴァ大学在籍とが証明されれば、すぐにでもそうした同郷人ないし近親者のために、一定の大きさの立像を立てることが許されるのである。

#### <エレミット派の教会>

- (1) ○マンテーニャの絵を見た。
  - 近古の画家の中で、私の驚嘆した一人である。
  - その画面には、何という鋭敏確実な現実性が溢れ出ていることであろう！
- (2) ○この現実性たるや、まったく真実にして、
  - 決してごまかしや当て込み、さては、徒に創造力に訴えるようなことはなく、
  - 「朴直」「清純」「明解」「周密」「誠実」「繊細」「如実」でありながら、
  - 同時に、「一脈の峻厳」「熱誠」「苦渋」の影を宿しており、
  - 後代の画家が、ここから出発したものであろうことは、私が、ティアノの絵に接して、認めたところである。
- (3) ○そして、やがて、彼らの
  - 「雄渾なる天才」「活発なる資性」は、
  - 「先人の精神に啓発」され、「先人の力に陶冶」されて、
  - 「次第、次第に高く向上」し、「地上から舞い上がって」、
  - 「天上」の、しかも「真実の姿態」を描出しうるに至ったのである。
  - 野蛮時代以降の美術は、このようにして発達してきたのである。

#### <コメント>

- (1) 「学びて時にこれを習う、また、よろこばしからずや。友あり、遠方より来る、また楽しからずや」(論語)志を同じくすると友達とともに、先生から学ぶ姿こそ美しいものではありません。パドヴァ大学の広場の立像を一度見てみたいと思います。
- (2) ゲーテのこのエッセイから、芸術作品の鑑賞の仕方、作成の心構え、文明への接し方数多く学ぶことができます。ゲーテの「イタリア紀行」、是非、一度、ゆっくりお読みください。
- (3) 松尾芭蕉の「奥の細道」も是非、ゆっくり、お読みください。受験勉強の合間に、たとえ 30 分、1 時間でもいいから、読みたい本や、読みかけの本を、じっくり、著者と「時空を超えた対話」を積み重ねながら、最後のページまで、行ったり来たりしながら、読むことも、「人格形成」「人格の基礎」をつくるうえで、意味があると考えます。是非、お薦めください。